とかち新聞
主筆　松山明
郵便089－37北海道足寄町　とかち新聞発行所　電話⑥2551番
(毎月15日発行)　1カ月200円　1カ年前納の場合2,000円

議員報酬引上げに勇断？

足寄町議会　審議会の答申を待たずに

足寄町でも町議会議員の報酬については特別職報酬等審議会の意見を聞いてから決めなければならないと条例で定められており、審議会ではきたる五月十日に結論を出すことにしていたのに、どうしたことか小林町長は三月十三日の町議会したのではないか。小林町長から特別職報酬等審議会の委員に任命されたのは湯浅義雄（連合自治会長）今村静子（婦連協会長）加藤晴敏（青連協会長）伊勢隆雄（地区労副議長）藤村与作（学識経験者）松山　明（報道機関）三宅隆義（社協会長）新沼芳雄（商工会長）永井庄一（農協理事）岡勝太郎（連合PT会長）の十氏で、第一回の会議は三月二十七日にひらき、富田助役からあいさつがあって、会長に藤村、会長代理に松山の両氏を推し、木村総務課長から諮問の事項と

一、議員報酬の額は、現行の額で適正であるか

二、適正でないとすれば適正な報酬の額はいくらであるか、また改正の時期はいつがよいか

について、管内町村議員の報酬、定数、活動数などの資料をそえての説明がありましたが、例によって議員報酬を上げてほしいともなんとも意志表示のない"白紙諮問"だったものの、各町村とも上げているのその点よろしく察してほしいといわんばかりの諮問ぶりでした。

この日は欠席の委員もおり、資料などを充分に検討することにして、第二回の会議は三月五日にひらきましたが、足寄町程度の町に較べて報酬は低いので、あるが、それには時期が悪いという点で全委員が一致しました。

その理由は

一、ほかの町村と違って足寄町の場合は、議員定数の二十六名は多いとして特に議員報酬をへらして福祉や教育や環境整備にあてるべきだという住民からの直接請求によって定数を四月の選挙から二十二名に減少することになったばかりなのに、ここで二十六名の議員報酬を引きあげることは住民感情をサカナデすることになる

二、審議会はただ三役給与や議員報酬をあげるためのカクレミノ的存在であってはならず、住民の側に立って審議すべきで、他町村が上げたから右ならえすべきでない

として、二十二名の新議会がきまってから五月十日に審議会を再開して結論を出すことに全会一致で決めました。

ところがこうしたとり決めもかみわらず、藤村会長が十二日に審議会を招集して、なんとかきよう結論を出して目下開会中の定例町議会に間に合せたいーとのことでした。

町議会はすでに九日に招集されていて、この日は休会で明十三日に再開して、しかも議員報酬などの条例提案するとのことで、これになっていることで、委員のなかにはどうせ五月の審議会で結論を出すのならいままで四月からの新年度予算に間に合せるべきではないかーとの意見も出ましたが、明日、町議会に提出される条例制定の議案によって都合主義による引き上げとなれば、議員報酬は現在どおりの　議長　十五万円
副議長　十万五千円
委員長　九万三千円
委員　八万三千円

としてすでに配布されているので、町の々憲法々ともいうべき条例に議員報酬の額を明記して提出した以上町議長は信念をもって原案を通すのが原則ではないかとの意見も出たものの、理事者側はきようここで報酬を上げてくれればそのとおり明日の議案は差し替えて提案するとのことで、これに対しては委員のなかでも理事者側の立場を考えてきよう結論を出すべきだ、イヤ時期が悪いーと意見が対立して長時間の論議となりました。

しかし審議会は理事者のご都合主義による引き上げとなれば、議員報酬は現在どおりの　議長　十六万八千円
副議長　十二万円
委員長　十一万円
議員　十万円

に引き上げることを提案しました。

これに対して鳴海一郎氏をはじめ各議員から審議会から答申がないのに増額するのは条例違反ではないかどの質疑がおこなわれたが、前は新年度予算からキチンとしたかったのでしょうがないとー保守の側で、ただ選挙のために地区労を利用しているのにすぎないとの声も出ています。

これに対して遠山氏の場合は、かつて中川後援会長だったので、自民党のタカ派とみられていましたが、いまは会長は石田富男氏に替り、中川代議士には、ちきみが付けて遠山氏の出馬断念をすすめたそうで後援会青年部で遠山氏支持に動くものはクビにするとの各企業からのしめつけで、中川派の支援は得られず無所属の立場です。

二、本人ははじめから立起の意志はなかったようで、去年の二月二十日に公民館でひらかれ町政研究会ーといってもこれといった肩書のない一般商業者や農民に青年層などの自宅を訪ね、足寄町の立地条件を生かして積極的に行動力のある政治力のある町長候補を押し出そうということになり、全員が準備委員となって候補者探しにあたった結果遠山氏一本にしぼって交渉をすすめたものの、本人は責任のある組合長の立場にあるし町長の器ではないと断りましたが、出馬要請の輪がひろがる一方で、しまいには白糸の自宅へ押しかけての懇請ぶりの熱意に本人よりも家族の方が参ってしまったそうです。

長男の謙二、次男の謙二両氏ともども、これだけ多くの方々が町のためを思って力強い推薦をお断りしたのでは家族はもうこれ以上ーと言い出したのではないかと断りましたが、ようやく三月に入って決意したそうで、それを裏書きするように立候補の届け出は小林氏は本人であるのに対して、遠山氏は元開拓協組合長の小野寺良次氏を代表とする四名の推薦届け出となっていることです。

激突の足寄町長選

小林氏　遠山氏の対決

連合時代とは－

ニュースを斬る

◆…都道府県知事や同議会議員の地方選挙の結果は保守・中道勢力の圧勝だったといわれています。

◆…いわゆる"連合時代"といわれて、どこかの政党がどこかの政党とくっつきあい野合して勝った勝つといってみたところで、どっちが勝ったというのか、つまるところは中道勢力が自民党に利用されたにすぎないのではないでしょうか。

◆…政党はそれぞれ立党の精神が異なり、それぞれ独自の綱領、政策をもって住民に訴えるべきものですから、選挙にあたって他党と連合するなどということは本筋ではないと思います。

◆…特に社会党から分れた民社党は民主社会主義を旗印にし、創価学会を母体とする公明党は人間性社会主義を唱えており、ともに自民党政府による秋口の衆議院の解散、総選挙は必至で、こうなると政党の連合もへったくれもない筈で八党が入り乱れてのたたかいとなるので、真の保守と真の革新との対決となりそうです。

◆…ときによってはアッチへベッタリ、コッチへベッタリの政党はどう評価されるかということです。

社会主義を標傍する革新政党である筈なのに、このたびの地方選挙では主として資本主義の自民党への協力が目立っていることは、選挙をアイマイなものにしたようです、

◆…どうしても連合が必要だとするならば、せめて自民党と新自由クラブとの連合時代とはー

◆…どうしても連合が必要だとするならば、せめてツタリの政党はどう評価されるかということです。

きわどい接戦模様

小林氏は三期十二年の手堅い実績をもつうえに五十代の若さで人あたりもよく十勝町村会の副会長の顔もあり全道林野協議会長の要職も推されてこれから四選も五選も安定した町行政のカジ取りを期待される人物で支持層も社会党・地区労の革新派から自民党の中川後援会・本名後援会・安田後援会などの保守派と中ひろく、町議会も多数派を擁しており、相手はだれであれ四選も楽勝とみられているのになぜあわてふためいているのでしょうか。

なにしろ相手の遠山氏は告示の七日前の突然の立起表明でことは短期決戦に追い込まれたことにもよりますが、遠山氏は専修大学経済学部を卒業後、旧陸軍に入隊、敗戦の二十年十月にハダカ一貫で足寄町白糸へ入植、開拓農協組合長として三十八年から現在まで十七年間の最長不倒記録をもち、町内でもっとも悪条件の開拓地で離農者が相つぐなかで、遠山組合長の持前の決断力と政治力でこの組合を単協としては日本一の存在にのしあげた人だけに、小林氏にとってはこれまでにない強敵とみられているようです。

小林氏の初当選は現職の高橋安蔵氏の公用廃止地問題のエラーに乗じ、二選は無競争、三選は西小学校の現位置での改築を争点にして岡靖前教育長を大差でくだした順調ぶりでしたが、こんどの場合は争点となる"目玉商品"はなく、町民会館の建設、里見ガ丘運動公園の整備、小坂山の開発などをふくめた総合十カ年計画は昨年から町議会の議決をへて、だれが町長になっても継承、実施しなければならないものです。

そういうことよりもこんどの場合は

一、町長の三選は一応の区切り、節目であって、それ以上はマンネリ化してアキがきている

二、小林氏は温厚、誠実な人柄で一生懸命にやってきたのはわかるが、積極的なリーダーシップに欠けていて、役場内外に"三人の町長"がいるとウワサされていることは、このさい自主的な判断で慎重に審議すべきであり、既定方針どおりに五月十日に結論をもちこすことにしました、

鳴海氏ら四名が反対

その翌十三日の町議会に小林町長は審議会の答申を待たずに議員報酬を四月から

議長　十六万八千円
副議長　十二万円
委員長　十一万円
議員　十万円

に引き上げることを提案しました。

これに対して鳴海一郎氏をはじめ各議員から審議会から答申がないのに増額するのは条例違反ではないかどの質疑がおこなわれたが、前は新年度予算からキチンとしたかったのでしょうがないというありさまで、小林氏はもはや革新ではなく保守の側で、ただ選挙のために地区労を利用しているのにすぎないとの声も出ています。

これに対して遠山氏の場合は

一、かつて中川後援会長だったので、自民党のタカ派とみられていましたが、いまは会長は石田富男氏に替り、中川代議士には、ちきみが付けて遠山氏の出馬断念をすすめたそうで後援会青年部で遠山氏支持に動くものはクビにするとの各企業からのしめつけで、中川派の支援は得られず無所属の立場です。

二、本人ははじめから立起の意志はなかったようで、去年の二月二十日に公民館でひらかれ町政研究会ーといってもこれといった肩書のない一般商業者や農民に青年層などの自宅を訪ね、足寄町の立地条件を生かして積極的に行動力のある政治力のある町長候補を押し出そうということになり、全員が準備委員となって候補者探しにあたった結果遠山氏一本にしぼって交渉をすすめたものの、本人は責任のある組合長の立場にあるし町長の器ではないと断りましたが、出馬要請の輪がひろがる一方で、しまいには白糸の自宅へ押しかけての懇請ぶりの熱意に本人よりも家族の方が参ってしまったそうです。

長男の謙二、次男の謙二両氏ともども、これだけ多くの方々が町のためを思って力強い推薦をお断りしたのでは家族はもうこれ以上ーと言い出したのではないかと断りましたが、ようやく三月に入って決意したそうで、それを裏書きするように立候補の届け出は小林氏は本人であるのに対して、遠山氏は元開拓協組合長の小野寺良次氏を代表とする四名の推薦届け出となっていることです。

住民監査請求への動き

議員報酬の引き上げについては、これまで常に審議会の答申どおりに提案してきた小林町長が「審議会の意見をきくものとする」との条例を無視してまで強引に増額に及んだのは、建て前は新年度予算からキチンとしたかったのでしょうがないーとの声もあるが、それとは別に、この町長は三月十三日の町議会の冒頭に、特別職報酬等審議会の答申を待たずに、議員報酬の引き上げを提案したために、この町長の勇断？ぶりに対して賛否両論三時間のあと二十一対四の採決で提案どおりに引き結論を出すことにしていたのに、どうしてこんなことになったのでしょうか。小林町長は、議員定数の二十六名は多いとして特に議員報酬をへらして福祉や教育や環境整備にあてるべきだという住民からの直接請求によって定数を四月の選挙から二十二名に減少することになったばかりなのに、ここで二十六名の議員報酬を引きあげることは住民感情をサカナデすることになる

二、審議会はただ三役給与や議員報酬をあげるためのカクレミノ的存在であってはならず、住民の側に立って審議すべきで、他町村が上げたから右ならえすべきでない

として、二十二名の新議会がきまってから五月十日に審議会を再開して結論を出すことに全会一致で決めました。

ところがこうしたとり決めもかみわらず、藤村会長が十二日に審議会を招集して、なんとかきよう結論を出して目下開会中の定例町議会に間に合せたいーとのことでした。

町議会はすでに九日に招集されていて、この日は休会で明十三日に再開して、しかも議員報酬などの条例提案するとのことで、これになっていることで、委員のなかにはどうせ五月の審議会で結論を出すのならいままで四月からの新年度予算に間に合せるべきではないかーとの意見も出ましたが、明日、町議会に提出される条例制定の議案によって都合主義による引き上げとなれば、議員報酬は現在どおりの　議長　十五万円
副議長　十万五千円
委員長　九万三千円
委員　八万三千円

としてすでに配布されているので、町の々憲法々ともいうべき条例に議員報酬の額を明記して提出した以上町議長は信念をもって原案を通すのが原則ではないかとの意見も出たものの、理事者側はきようここで報酬を上げてくれればそのとおり明日の議案は差し替えて提案するとのことで、これに対しては委員のなかでも理事者側の立場を考えてきよう結論を出すべきだ、イヤ時期が悪いーと意見が対立して長時間の論議となりました。

しかし審議会は理事者のご都合主義による引き上げとなれば、議員報酬は現在どおりの　議長　十六万八千円
副議長　十二万円
委員長　十一万円
議員　十万円

に引き上げることを提案しました。

これに対して鳴海一郎氏をはじめ各議員から審議会から答申がないのに増額するのは条例違反ではないかどの質疑がおこなわれたが、前は新年度予算からキチンとしたかったのでしょうがないというありさまで、小林氏はもはや革新ではなく保守の側で、ただ選挙のために地区労を利用しているのにすぎないとの声も出ています。

これに対して遠山氏の場合は

一、かつて中川後援会長だったので、自民党のタカ派とみられていましたが、いまは会長は石田富男氏に替り、中川代議士には、ちきみが付けて遠山氏の出馬断念をすすめたそうで後援会青年部で遠山氏支持に動くものはクビにするとの各企業からのしめつけで、中川派の支援は得られず無所属の立場です。

二、本人ははじめから立起の意志はなかったようで、去年の二月二十日に公民館でひらかれ町政研究会ーといってもこれといった肩書のない一般商業者や農民に青年層などの自宅を訪ね、足寄町の立地条件を生かして積極的に行動力のある政治力のある町長候補を押し出そうということになり、全員が準備委員となって候補者探しにあたった結果遠山氏一本にしぼって交渉をすすめたものの、本人は責任のある組合長の立場にあるし町長の器ではないと断りましたが、出馬要請の輪がひろがる一方で、しまいには白糸の自宅へ押しかけての懇請ぶりの熱意に本人よりも家族の方が参ってしまったそうです。

長男の謙二、次男の謙二両氏ともども、これだけ多くの方々が町のためを思って力強い推薦をお断りしたのでは家族はもうこれ以上ーと言い出したのではないかと断りましたが、ようやく三月に入って決意したそうで、それを裏書きするように立候補の届け出は小林氏は本人であるのに対して、遠山氏は元開拓協組合長の小野寺良次氏を代表とする四名の推薦届け出となっていることです。

(以下裏面へつづく)